

無気力が下田式性格検査尺度に与える影響

第一工業大学 共通教育センター 永田 正明

The Effect of Helplessness on the SHIMODA Personality Inventory Subscale

Common Education Center Masaaki Nagata

The purpose of this study was to investigate whether the helplessness of high school students affects the subscales of the SPI personality inventory by partial correlation analysis. As helplessness affected SPI, "decreased-motivation and feeling of helplessness" had a positive effect on "self-uncertain character." Extremely discouraged students often develop problem behaviors, but it is common for students to show self-revealing as a preliminary step. For example, the clothes and hair are disturbed, the relationship with working and unemployed individuals outside of school, and the rough language towards parents and teachers. Next, "passive relationships" also had a positive effect on "autistic character," but first-year and second-year high school students are also at a time when their ego is unstable and their friendships are easily broken and they are apt to be isolated. I think there are not a few students who feel a sense of autism at such times. In addition, "lack of the domain to devote themselves" had a negative effect on "syntonic character". In high school students, if there is nothing to devote to, including club activities, school events, class events, and spending time with friends, as well as learning activities, the result is that the synchronism that forms the basis of friendship, such as fun conversations and spending time with classmates and friends, does not grow.

Key words: premorbid character, autistic character, self-uncertain character, syntonic character, helplessness

1. 問題

うつ病と関連する病前性格の研究は、古くは Kraepelin の抑うつ性素質から Kretschmer の循環気質、そして近年の Akiskal (1987, 2003) の抑うつ気質といった気質論がある。病前性格論で言えば、Tellenbach (1961) のメランコリー親和型と下田 (1941) の執着性格が国内では論じられてきた。もっとも、Tellenbach がメランコリー親和型を提唱する以前から類似の病前性格の特徴はすでに記述されていたが、Tellenbach や下田が論じたような発病状況論にまで言及していなかった。このような不明瞭な点について、Tellenbach は内因性の概念を「エンドン因性」といった現象界を超えた理念でもって説明し、単なる病前性格の記述にとどまらず病前性格と発病状況の補完性を見出した。また下田は「ある期間の過労事情(誘因)→神経衰弱的症狀(睡眠障害・疲労性亢進)→休養(正常者)、疲労に抵抗して過労(躁うつ病者)→抑うつ症(躁うつ病者)」と説明し、執着性格者の特に「感情の強度の持続性」が精神的限界を乗り越えた結末である躁うつ病を招くとした。

このように特異な性格者が重荷状況に耐え切れずに躁うつ病に至るといった理論は、下田の門下生だけが知るにとどまっていた。しかし 1961 年に Tellenbach のメランコリー型が発表され、その特徴が執着性格と類似性があったことや、平沢 (1962) による執着性格の研究が発表されたことで、その後は日本における病前性格論として執着性格とメランコリー親和型が発展することとなった。平沢 (1962) は執着性格を示す 105 の自験例から、下田の「偏執性・熱中性」の力点をメランコリー型の特徴と重なる「几帳面・仕事熱心・対人過敏」へと移す提案を含めつつ執着性格を評価した。

ここに指摘している性格標識「対人過敏」が下田の執着性格には欠如しているように書かれた論文もあるが、下田の述べている「模範青年・模範社員」といった表現中に対人配慮をくみ取ることができるのではなかろうか。

躁うつ病の精神病理学が日本で開花したのは1950年代であり、1960年代からは躁うつ病の発病状況論が展開された。躁うつ病型の精神疾患と異なる点の一つに発病の「状況因」がある。この「状況因」は身体症状や精神症状とともに取り上げられる重要な診断に係わるものであるといった点は現在でも認められている。残念に思われることは、DSMⅢにて内因性うつ病というカテゴリーを削除し、うつ病のサブタイプにメランコリー型という分類を追加したのに、DSMⅣではこの診断基準が廃止されたことである。しかし日本精神病理・精神療学会シンポジウム(2013)では「下田の執着性格の今日的意義」が研究協議メインテーマともなったことや、現代の日本における「執着性」の現象形態と、それに関連する病態についての検討は、精神病理学に要請された課題であるとしている(玉田, 2018)。このように日本国内における臨床現場では、依然として笠原・木村分類のような患者の全体像を掌握することの必要性が国内の多くの精神科医からも叫ばれている。

2. 目的

上述したように、うつ病の病前性格を質問紙法により測定し、その知見を蓄積し検討することは、今後の生物社会心理モデルの検討といった観点からも重要になってくることが予想される。国内の精神科医がその臨床経験から病前性格的視点の必要性を提唱し、それを質問紙法で測定しようとするものとしてSPI下田式性格検査がある。SPI下田式性格検査の下位尺度にある病前性格特性と現代高校生の呈する無気力感との関係について考察することで、青年期における無気力感が精神的健康度に与える影響の可能性を少しでも考えられるのではなかろうかと思う。なお影響の方向性としては、SPI性格検査尺度も無気力尺度もいずれも心的特性ではあるが、無気力感がSPI性格特性に影響を与えると仮定した。

本研究では、高校生の呈する無気力感がSPI性格検査の下位尺度に影響するのかについて偏相関分析により検討した。

3. 方法

(1)被験者：A県内2高校の1・2年生163名(男子98名, 女子65名)

(2)無気力質問紙：

抑うつ症状や抑うつ気分を測定する自己記入式尺度については、外国版ではBDI(Beck Depression Inventory, 1996), Kazdinらの絶望感尺度(The hopelessness scale for children, 1986), SDS(Zung Self-Rating Depression Scale, 1965), またこれらの日本語版などが知られている。何れも無気力の気分や症状そのものを測定するものとして優れているが、健全な高校生の日常的に見られる無気力を測定するものとしては、中澤・宮下(1995)の作成した無気力質問紙の方が適していると考えた。中澤らの尺度は高校生・大学生を対象に、日常生活における無気力の程度を多面的に捉えることを主眼としているので、無気力の分野(下位尺度)をできるだけ多くとらえられるだろうと予測されるため本尺度を選定した。本質問紙は以下の5側面から尺度を構成している。1「授業・学習態度・テスト有能感」、2「生

活のリズム・疲弊・身体不調」, 3「人生目標・将来の見通し」, 4「達成度・動機づけ・自己効力感」, 5「社会的場面での非能動性・引きこもり」。

(3) S P I 下田式性格検査:

標準版成人用 1987 年版, 日本文化科学社。下位尺度は「S: 自閉性格」「N: 神経過敏性格」「U: 自己不全性格」「I: 執着性格」「C: 同調性格」「H: 自己顕示性格」「L: 虚偽尺度」であり, それぞれ 10 項目ずつからなる。

(4) 実施日

1 回目 1997 年 10 月, 2 回目 1998 年 10 月

4. 結果

(1) 因子分析

33 項目を最尤法により固有値 1.0 以上の基準で 6 因子を抽出し, プロマックス回転を施した。因子負荷量 .30 以上を基準として, 因子名は, 第 1 因子「意欲減退・無力感」, 第 2 因子「消極的人間関係」, 第 3 因子「将来の展望の欠如」, 第 4 因子「消極的活動性」, 第 5 因子「学習意欲の欠如」, 第 6 因子「打込む領域の欠如」と解釈された。内的整合性は, クロンバックのアルファ係数により算出した。第 1 因子よりそれぞれ .73 .75 .81 .67 .63 .60 であった。第 4, 第 5, 第 6 因子のアルファ係数がやや低い, 項目数が 4~6 と少ないわりに因子負荷量はあるので 6 因子解の尺度構成とした。

S P I 性格検査についても念のため因子分析(最尤法, バリマックス回転)を行ったが, ほぼ完全に標準版の下位尺度どおり 6 因子(虚偽尺度まで入れて 7 因子)に分かれて性格特性を同定できたので, 標準版の 6 因子それぞれ 10 項目の合計得点を分析に使用した。

(2) 基本統計量

Table 2 には 1 年間という 2 時点で測定を行い, 1 回目と 2 回目の S P I の 6 尺度及び無気力 6 尺度について平均, 標準偏差, 相関係数(尺度の安定性)を示した。

Table 2 から相関係数は .50 ~ .67 の範囲にあり, 因果関係を検討するには適度な値であると思われる。また, S P I の相関係数が無気力尺度の相関係数よりも高い値であることは, 無気力尺度より S P I 尺度の方が安定であり, 因果の方向性として無気力が S P I に影響を与えるという方向性を示唆すると考えられそうである。

(3) 偏相関分析

Table 3 には 1 回目の無気力尺度と 2 回目の S P I 尺度との偏相関を, 1 回目の S P I 尺度をコントロールして示した。無気力尺度のうち, S P I に最も影響を与えていると考えられるものは「意欲減退・無力感」尺度から「H: 自己顕示性格」への影響 .25 ($p < .001$) であった。「意欲減退・無力感」尺度は心的症状としての無力感であり, やる気を失った状態であるが, 生徒がやる気を失うと問題行動に発展していくことが多い。特に本人が不本意入学など元々目的意識を持たない状態で学校生活を続けているとその傾向が強い。そして, そういった問題行動の前段階として自己顕示性を示すことは普通によくみられる。例えば, 服装や頭髮の乱れや学校以外の有職・無職少年との付き合い, 親や教師に対する言葉遣いの荒さなどである。さらに高校 2 年生の 2 学期が, 生徒の悪い面や問題行動が最も現れやすい時期でもあるので, そのように考えると本被験者でのこの結果は納得できるものである。

次に「消極的人間関係」尺度から「S：自閉性格」への影響が .19 ($p < .05$) であった。高校1~2年生は、最も親しい間柄の友人関係を構築しやすい時期でもあり、自我が不安定なため友人関係を壊しやすく孤立しやすい時期でもある。そういった時期にあって、人間関係に悩むことは自然な流れでもあり、それがもとで自閉感を抱く生徒も少なからずいるのではなかろうか。そのためか Table 2 を見ると、S：自閉性格平均得点の増加量はさほど大きくはないが、6尺度のうちでは最も大きいといった結果が出ている。

「打込む領域の欠如」尺度からC：「同調性格」への影響は $-.16$ ($p < .05$) であった。マイナスの値であることは、以下のような理由であると考えられる。高校生の本分である学習はもとより、部活動や学校行事・学級行事、遊びといったものも含め、これとって何かに熱中し打ち込めるものがなかった場合、当然周囲の級友や友人との楽しい会話や遊びといった仲間関係構築の基礎となる同調性も育たないといった結果につながるはずである。また逆に、自分に打ち込むものが見つかった場合、必然的に同調性や協調性といったものが育ってくるのではなかろうか。

Table 1 無気力の因子分析結果

	第1因子 (意欲減退・無力感)	因子負荷量
X28	学校の授業についていけない	0.614
X15	いくら努力しても、だめなことが多い	0.585
X16	自分がなさげなくていやになる	0.565
X33	いろいろなことが、めんどくさく思えることが多い	0.556
X29	つかれて、何もしたくなくなるが多い	0.516
X1	授業のノートは、きちんととるようにしている (R)	0.495
X31	いくらがんばってもどうにもならないので、勉強してもむだだと思う	0.492
X6	授業には、なかなか集中できない	0.480
X13	つかれて、授業中いねむりをしてしまうことが多い	0.437
X12	そうじは、やらないことが多い	0.404
X20	努力すれば、それだけのことはえられる (R)	0.363
	第2因子 (消極的人間関係)	
X19	一人でいるのが、いちばんだ	0.744
X5	人とつきあうのは、めんどくさい	0.724
X3	ほかの人といっしょにいと、くたびれる	0.699
X10	悩みを話せる人がいない	0.690
X30	困ったとき、相談できる人がいる (R)	0.578
X26	同級生とは、どうでもよいことしか話さない	0.491
	第3因子 (将来の展望の欠如)	
X32	将来やりたいことが、はっきりしている (R)	0.856
X8	将来つきたい仕事が、決まっている (R)	0.842
X2	高校卒業後の進路を決めている (R)	0.769
X18	自分の夢が実現するとは思えない	0.556
	第4因子 (消極的活動性)	
X22	委員など、責任ある役につくのはいやだ	0.735
X7	学級内での係りは、できればさげたい	0.640
X23	すぐ、体がだるくなってしまう	0.490
X24	クラブ活動や、部活動はやりたくない	0.419
	第5因子 (学習意欲の欠如)	
X11	テストがあると言われたら、そのための勉強をする (R)	0.664
X9	もっと良い成績をとりたい (R)	0.618
X25	テストの成績が悪くても、あまり気にしない	0.602
X21	家で、自分から勉強することはない	0.419
	第6因子 (打込む領域の欠如)	
X27	勉強以外に、これだったら自分にまかせてくれというものがある (R)	0.757
X4	勉強以外で熱中しているものがある (R)	0.680
X17	自分には、得意なものがある (R)	0.634
X14	勉強でわからないことがあると、自分で調べてみる (R)	0.320

Table 2 S P I と無気力の平均(標準偏差)及び相関係数

尺度	1回目	2回目	相関係数	大学生 ^{a)}
S P I				
S：自閉性格	5.65 (4.27)	6.23 (4.54)	.67	6.15(4.22)
N：神経過敏性格	6.62 (3.77)	6.99 (3.91)	.67	6.12(3.90)
U：自己不全性格	11.30 (4.56)	11.18 (5.16)	.62	10.43(5.56)
I：執着性格	7.34 (3.65)	7.18 (3.72)	.53	7.92(4.33)
C：同調性格	12.04 (3.86)	11.98 (4.06)	.65	12.17(3.96)
H：自己顕示性格	8.26 (4.46)	8.64 (4.41)	.64	8.71(4.69)
無気力				
意欲減退・無力感	29.06 (6.78)	29.52 (7.86)	.56	
消極的友人関係	12.60 (4.93)	12.92 (5.40)	.59	
将来の展望の欠如	10.87 (4.29)	11.34 (4.30)	.50	
消極的活動性	12.56 (3.31)	12.79 (3.86)	.57	
学習意欲の欠如	9.96 (3.45)	9.84 (3.78)	.64	
打込む領域の欠如	10.66 (3.31)	10.39 (3.58)	.59	

注) すべての相関係数で $P < .001$ である。

a) S P I 研究会(1987)

Table 3 1回目無気力尺度と2回目 S P I 尺度との偏相関係数

	S P I 下位尺度					
	S	N	U	I	C	H
意欲減退・無力感	.03	.14 [†]	.06	-.05	.02	.25***
消極的人間関係	.19*	.00	.05	.10	-.06	.06
将来の展望の欠如	.02	-.05	.12	.04	-.09	.02
消極的活動性	.03	-.03	.03	-.01	-.10	.08
学習意欲の欠如	.04	-.11	-.10	-.04	.00	.04
打込む領域の欠如	.12	.14 [†]	.08	-.04	-.16*	.11

*** $P < .001$ * $P < .05$ [†] $P < .1$

5. 考察

最後になるが、下田のいう病前性格としての「執着性格」や「同調性格」を、臨床現場で抑うつ病者に対して自己評価なり他者評価できれば、本研究における無気力と執着性格（あるいは同調性格）との負の相関関係が正の相関関係となるのかもしれない。具体的には執着性格得点が高いと無気力得点も高く出て、同調性格得点が高いと無気力得点が高くなるようになることも考えられるのではなかろうか。

謝辞

本研究にあたり御協力いただきました、塩見邦雄 兵庫教育大学名誉教授に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Akiskal, H. S. and Mallya, G. 1987 : Criteria for the 'soft' bipolar spectrum : treatment implications. *Psychophthology Bulletin*, 23:68-73.
- Bleuler, E. 1922 : Die Probleme der Schizoidie und Syntonie. Z.n.78.
- 平沢一 1962 うつ病にあらわれる「執着性格」の研究. *精神医学*, 4 ; p 229 - p 237.
- 笠原嘉・木村敏 1975 うつ状態の臨床的分類に関する研究. *精神経誌*, 77 ; p -715 - p 735.
- 笠原嘉 1976 -うつ病の病前性格について- 躁うつ病の精神病理 1. 弘文堂.
- 笠原嘉・山下格・広瀬徹也 1992 うつ病(気分障害). *精神科選書* 8. 診療新社.
- 木村敏 1976 -いわゆる鬱病性自閉をめぐって- 躁うつ病の精神病理 1. 弘文堂.
- 小出浩之 1990 -自閉- 異常心理学-講座VI 土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏 責任編集, *神経症と精神病* 3 ; p 173 - p 227.
- Kranz, H. 1969 : Depressiver Autismus. In: Hippus u. Selbach (Hrsg.) : Das depressive Syndrom. Urban & Schwarzenberg, Munchen / Berlin / Wien.
- Kretschmer, E. 1951 : Körperbau und Charakter. 20 Aufl. Springer, Berlin. (相場訳『体格と性格』文光堂)
- 松倉素子 1993 入院うつ病患者の臨床的特徴-単極性うつ病と双極性うつ病の臨床特徴の相違についての検討-. *杏林医会誌*, 24 ; p 193 - p 198.
- Minkowski, E. 1953 : La Schizophrenie, Desclee de Brower, Paris (村上訳『精神分裂病』みすず書房)
- 森山公夫 1968 両極的見地による躁うつ病の人間学的類型学. *精神経誌*, 70 ; p 922 - 943.
- 永田正明 2021 S P I 性格検査標準版における執着性格の因子構造. *応用教育心理学研究*, 37 巻 2 号 ; p 87 - 93.
- 中澤潤・宮下一博 1995 青年期の無気力 -高校生・大学生を対象とする無気力尺度の開発- 千葉大学教育学部教育相談 研究センター年報, 12, 11 - 19.
- 下田光造 1941 躁うつ病の病前性格について. *精神経誌*, 45 ; p45 - p101.
- 塩見邦雄・永田正明 1998 高校生の無気力についての研究. *兵庫教育大学研究紀要*, 18 巻 1 分冊 ; p 1 - 12.
- S P I 研究会 塩見邦雄・吉岡千尋・田中宏尚 1987 下田式性格検査解説書. 日本文化科学社.
- 玉田有 2018 執着性格の構成過程に関する考察. *精神経誌*, 120 ; p11 - 24.
- Tellenbach, H. 1961 : Melancholie: zur Problemgeschichte - Typologie Pathogenese und Klinik. Springer. Berlin.
- 上島国利・浅井昌弘・工藤行夫 1981 最近 30 年間のうつ病の臨床統計 - 慶大精神神経科入院患者の統計より -. *精神医学*, 23 ; p 683 - p 695.
- 牛島定信 2013 精神分析からみた執着性格(下田). *臨床精神病理*, 第 34 巻, p78 - 83.
- 矢崎妙子 1976 躁うつ病の精神療法 - 特に中間期精神療法を通してみた病者の価値構造について -. *躁うつ病の精神病理 I* 笠原嘉 編, p 221 - 239.
- 吉永五郎 1962 躁うつ病の病前性格について *九州神経精神医学*, 9 ; p148 - 168.